

計画 3-1

新生児ニホンザルのストレスに対する反応
川上清文（聖心女子大・文・心理）

昨年度に引き続き、実験を重ねた。新生児ニホンザルを対象として、ストレス場面に音（ここではホワイトノイズ）を呈示すると、ストレスが緩和されるがどうか確かめるといものである。反応指標は、唾液中および血中コルチゾルと行動評定である。（今回の分析には唾液中コルチゾルは含めない。）採血をストレスとし、採血前後の血中コルチゾルを分析した。コルチゾル値が上昇した場合↑、下降した場合↓と表すことにする。採血時の様子をビデオに撮り、それを表情と泣き声の面から評定した。10秒1こま当たりの評定平均値（0-2）を算出した。

個 体 番 号	統 制 条 件		W N 条 件	
	コルチゾル	評定値	コルチゾル	評定値
Mff1714	↑	0.39	↑	0.36
Mff1715	↑	0.96	↑	0.65
Mff1717	↑	0.16	↑	0.29
Mff1719	↓	0.83	↑	0.00
Mff1741	↑	0.25	↑	0.00
Mff1746	↓	0.62	↑	0.00

予想と異なり統制条件の方がコルチゾル値が下がった。行動に表すことによりストレスを発散させるという研究知見とは一致したことになる。

（実験に当たり協力して下さった、霊長研の鈴木樹理・友永雅己、聖心の井植麻子の諸氏に謝意を表する。）

計画 3-2

霊長類におけるストレス反応に関する研究

錫村明生（奈良医大・神内）、田丸 司（奈良医大・神内）、伊藤由里（藤田保衛大・神内）、鈴木樹理（京都大・霊長類）

鬱状態などの精神障害、気分の変調などの発症機序は不明であるが、これらが後遺症を残さず治りうることを考えると、脳の機質的な変化よりも一時的な機能調節障害と考えられる。これらの機能調節因子を探索する目的で、アカゲサルにヒトでは鬱状態を引き起こすことが知られているインターフェロン α を投与し、髄液中のサイトカイン、モノアミンおよびその代謝産物を検索し、鬱状態の発症機序にアプローチした。本年度はアカゲサル4頭をもちい、無治療群、5日30万単位/頭のインターフェロン α を10日間連注、ついで、週3回のわりで7週間注射した。前、1-12週目に血液、髄液を採取し、血清、髄液中のサイトカイン(IL-1, 2, 3, 5, 6, TNF α , IFN)、モノアミンおよびその代謝産物を測定した。本年度は、行動観察法として、ビデオモニターを用いた。血清、髄液中のサイトカインには有意な上昇は見られなかった。インターフェロン注射群で1週目から髄液中の tyrosin, tryptophan, MHPG の有意な低下を認めた。ビデオモニターの結果は現在検討中である。